

氏 名	鍾 翀
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 328 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	東南中国における地域社会の形成とその構造に関する歴史地理学的研究 ——浙江省東陽県北江盆地の宗族社会を中心に——

論文調査委員 (主 査) 教授 金 坂 清 則 教授 愛 宕 元 助教授 小 方 登

論 文 内 容 の 要 旨

長江以南、雲貴高原以東の地域は東南中国と言われ、中国の大区分上の地理的単元をなす。本論文は日本の3倍近い約100万 km²という広がりを持つこの東南中国を対象に、地域社会の形成とその構造を、3つの地域スケールで、かつ三千年に及ぶ時間幅を問題にしつつ、歴史地理学の立場から論じたものである。全体は、序章および、各2章、3章、1章からなる第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部と終章の計8章から構成される。

序章では、地域社会の形成とその構造をマルチスケールで歴史地理学の立場から論じること、とりわけ、宗族社会という特質をめぐって考察することと、デルタ地域に比べ研究の遅れている河谷平野地域を対象とすることの重要性を提起する。歴史学・考古学・社会学・文化人類学などからの研究の評価と批判に基づいて本論文を3部構成にする根拠も提示し、このような研究のために不可欠なフィールドワークの軌跡も開示している。

第Ⅰ部「東南中国の歴史地理的性格と本論文の研究資料」では、東南中国の全域を対象としたマクロスケールでの検討が2つの側面からなされる。そのうち第1章では、東南中国という地域の特質を、「百越之地」として登場して以来の歴史や、河谷平野とデルタに2大別される地形環境、方言にみる重層的地域構造などから説明する。また同姓の父系親族集団である宗族が東南中国の地域社会を最も特徴づけ、宗族村落が卓越する事実に着目しつつ宗族についても説明する。この結果、東南中国の歴史地理的特質が、その内部の地域的多様性と歴史的安定性、および宗族の卓越性の3つに集約しうることを指摘する。続く第2章では、宗族の私的な史書であり宗族にとって不可欠な族譜について、一般論的に、かつ、本論文の最重要対象地域である北江盆地の族譜群に則して考察し、正史や地方志にはない独自の資料的価値を有することを明示する。また、詳細かつ大部な伝存目録を付している。

第Ⅱ部はその表題「北江盆地における宗族社会の歴史地理—ミクロ・スケールの検討—」が示すように、浙江省東陽県にある北江盆地における宗族社会の形成とその構造をめぐって考察したものであり、本論文では最もミクロなスケールでの研究に当たり、論文全体の中核をなす。このうち第3章では、北江盆地の代表的宗族村落である大村の蔡宅を例として、宗族と村落の関わりを解明する。蔡宅における中心的宗族鹿峰蔡氏を対象として、その発展を『鹿峰蔡氏宗譜』および他の宗族の族譜との照合などを通して明らかにした後、北江盆地に展開する鹿峰蔡氏の分枝村落や蔡宅周辺の中小村落の特質を、形成史や地域的特徴も絡めて分析する。この結果、典型的な宗族社会の構造とその形成の一端が明らかになる。

これに対して第4章では、北江盆地に居住する宗族が183あることを見出した上で、そのすべてを対象とした分析を、膨大な資料整理を伴って行う。そして宗族の空間形態には集中型・孤立型・拡散型の3つがあるが、この類型と形成時期との間の関係は必ずしも明瞭でないことを示す。また、始遷祖の移住記録を統計分析することにより、北江盆地における宗族社会の形成過程を、発生期(8～14世紀)、発展期(15～17世紀)、成熟期(18～20世紀)に三分できる可能性も示す。

続く第5章では、始遷祖に関する記録の吟味という本論のみならず、研究史的にも大きな問題の解決をめざすために、北江盆地の族譜(北江譜)の編纂史に着目することによって、族譜に記された始遷祖よりも宗族の形成が古いことや、族譜の

創製年代よりも東陽始遷祖の移住年代が確実に古いことを証明する。また、北江譜の編纂史が3期に区分されることや、それと地域社会の変容との関係について検討し、10～15世紀における地域社会の「宗族化」を指摘する。

第Ⅲ部「東南中国における歴史文化地域の形成—メソ・スケールの検討—」では、北江盆地よりは空間規模の大きな「姑末」という歴史文化地域を取り上げてその形成のプロセスや範囲を、諸史料を分析したり、現代の呉語処衢片という方言区域に着目することによって解明する。

終章では、東南中国の地域社会の時空構造に関して3つの点を指摘し、結論とすると共に、今後の課題と展望を提示する。結論の第1は、東南中国では時に社会変化が明瞭に現れるものの、全体としては安定性が強調されてよいこと。第2は宗族組織の集中的発生が13～14世紀にみられるとはいえ、宗族の基礎をなす血縁集団が古くから自然発生的に結集してきたことがより本質的であり、東南中国の安定性にも通じるということ。そして第3は、東南中国の特質である多様性は、多数の河谷平野が分立するという自然地理的特質と民族誌の編成という2つが絡み合うことによって生成してきたということである。

論文審査の結果の要旨

本論文は東南中国の地域社会の形成とその構造を、東南中国を最も特色づける宗族に特に着目し、歴史地理学を軸とする広い視座から論じたものである。日本の『人文地理』および中国の『歴史地理』という、最も権威のある学術雑誌に掲載された2論文を含む計6編の既発表論文を再構成した上に、新稿を加え、より大きな枠組みの下にまとめている。序章に続く本論については対象地域の広狭によって3つに分け第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部という構成にし、力点を「北江盆地における宗族社会の歴史地理—ミクロ・スケールの検討—」と題する第Ⅱ部（第3章～第5章）に置く。そして、その前後に、マクロスケールの考察を行う第Ⅰ部「東南中国の歴史地理的性格と本論文の研究資料」の2章（第1章～第2章）と、メソスケールの考察を行う第Ⅲ部「東南中国における歴史文化地域の形成—メソ・スケールの検討—」の1章（第6章）を配し、最後に終章を設ける。このような構成をとることによって、理論構成の実にしっかりした論文に仕上がっている。

このような本論文は、特に以下の諸点において高く評価される。

その第1は、きわめて重要な資料であるにもかかわらず、歴史地理学の分野からは、日本・中国を問わずこれを用いた研究が皆無に等しい中であって、申請者が族譜を真正面から資料として取り上げた点である。しかも、第2に、歴史地理研究として先駆的というだけでなく、族譜を用いた日本や中国における文化人類学・歴史学・社会学からの研究の評価と批判を厳密に行い、族譜を扱う上で最も問題となる資料批判を従来に比べて格段に進めることによって、理論的にも方法的にも最もすぐれた論文として完成させたことである。したがって、本論文は、日本・中国のみならず世界の諸科学からの族譜研究にとっての必須文献として位置づけられていくと考えられる。第3点は、東南中国という地域と地域社会を歴史地理学の立場から研究することの意義と、その際に族譜を資料として用いることの不可欠性を正しく踏まえていることである。単に新しい未開拓の資料という理由で族譜に着目しているわけではないことは、十分に評価されてよい。

しかも申請者は、族譜を用いた研究に最もふさわしい地域として、典型的宗族社会が展開してきた北江盆地を取り上げ、従来の研究者のだれもが成し得なかった徹底的な族譜伝存調査を自らも族譜を発掘しつつ行い、その成果を十二分に生かした整理・分析・考察を進めた。この結果、本論文は明示された資料自体に今後の族譜研究に貢献する大きな資料的価値があるのみならず、族譜資料を扱う際の方法論の点でも今後の研究にきわめて役立つものになっている。以上が第4の評価点である。また、新しい族譜のみならず、考古資料その他の発掘の難しい資料を申請者が発掘した大きな意義を考慮するならば、長期に及ぶフィールドワークをこれほどまで成功裡に成し遂げたこと自体が評価されてよい。これが第5の評価点である。この成功によって申請者は族譜に限らない情報と資料を収集し、考察に生かすことができたのである。このような膨大なデータを整理し分析し得たのは、申請者がコンピュータを駆使したからである。族譜資料の特質に照らせば、族譜研究におけるコンピュータの活用は不可欠であり、この点で本論文はそのモデルとしても高く評価される。

さらに、本論文において、文献・族譜・考古資料の分析に中国歴史地理学・歴史学・史料学の伝統的方法論を取り込み丹念な考証を行う一方で、日本の歴史地理学研究において進んでいる、地図化に代表される、各種資料の地域論的分析・考察法を積極的に導入し、それによって、従来みられなかった新しい指摘や見解を多数提示できた。このことは、今後の中国の歴史地理学研究に大きな影響を及ぼすと考えられる。村・宗族・家・個人といったレベルでの研究の可能性と重要性を中国

歴史地理学界に提示できた意義は、末長く評価されるに違いない。他方、日本の歴史地理学界に対しては、時の断面における地域的特質の研究に偏りすぎている問題、歴史的展開を歴史地理学の側からもより積極的に論じていく重要性を、具体的に示した点で大きく寄与すると考えられる。

最後に強調されるべきは、申請者の研究が歴史地理学という学問をベースとしつつ、その枠組みにとらわれることのないきわめて学際的・総合的・統合的な研究であることである。本論文は、歴史学・文化人類学・社会学・言語学、東南中国地域研究などいくつもの隣接分野の研究に寄与すると考えられる。

もちろん、本研究で行っていないこともある。例えば、対象地域の土地開発の歴史地理的展開を地形・水文条件や社会史的背景などと絡めて分析し、これと宗族社会の形成・発展との関わりを明らかにすること、典型的な宗族集落のよりミクロな空間構造の分析、さらには、河谷平野地域とデルタ地域の対比といったレベルではなく、河谷平野の多様性に留意した研究などである。これらの課題がまた本研究の将来性の大きさを示している。

このように本論文は、東南中国という地域の地域社会としての特質が宗族社会という点に認められることに着眼しつつ、歴史地理学を含む広い視野から研究し、これを鮮やかに描き出すことに見事に成功した画期的論文である。したがって、人間・環境学研究科人間・環境学専攻人間社会論講座（比較地域構造論）にふさわしい研究と評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成18年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。